KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

関西外大-バックネル大学E-mailプロジェクト2004

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日木, くるみ, Armstrong, Elizabeth メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, バックネル大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006277

関西外国語大学 研究論集 第82号（2005年８月）
Journal of Inquiry and Research, No.82（Aug. 2005）

関西外大－バックネル大学 E-mail プロジェクト2004

日　木　くるみ
Elizabeth Armstrong

１．はじめに：プロジェクトの背景

本稿は関西外国語大学国際言語学部ゼミナールⅡ（日木ゼミ）の授業の一環として取り組んだ e-mail プロジェクトの教育報告である。日木ゼミでは実際に役立つ英語力の養成を目的としており、映画のような authentic materials を使った生の英語の聞き取りや、発表などを行ってきた。2003年度から受身的な学習に加えて発信型の学習も取り入れようと、グループごとに日本文化のある側面（たこ焼き、相撲、など）に関して調べ、ホームページで成果を発表した。英語で自国の文化についての情報発信を実践できたことは、極めて有意義なことであった。また、リアクションを得る意味でアメリカの２大学（Purdue 大学と Kennyon 大学）に送り、コメントを求めた。同世代の学生からコメントを受けたことは、ゼミの学生にとってよい励みになった。これを機会に、さらに学生間の頻繁な交流を求める声が大きくなった。

その要望に応えるべく、授業で何ができるかを模索した。学生がアクセスしやすい交流媒体として電子メールの活用が候補としてあがってきた。杉本・朝尾（2002）は、「意味のある読み手、書き手という関係を築く道具」として電子メールを位置づけ、電子メールが authentic communication を促進する可能性を示唆している。また、山内（1996）は「書く内容が、交信相手が興味・関心を持つものであるほど、より充実した交信を長期にわたって続けることができる。」（p.111）と述べ、学生同士に共通した興味・関心が電子メールを使った授業を成功させる重要な要素だと示唆している。

そのような中で、Bucknell 大学[1)]の教員、Elizabeth Armstrong[2)] と協力して日本語を学ぶアメリカ人大学生と英語を学ぶ日本人大学生間で e-mail を通して交流ができないかと、話し合いを始めた。お互いの言語・文化に興味を持っている学生同士の交流になるので、教えあい、学びあうことができると考えた。以下はそのプロジェクトの報告である。

2．E-mail プロジェクト概要

2.1　目的

今回のプロジェクトではメール交換できる時期が極めて限られていたので、英語力・日本語力の向上までは望めないと判断した。しかし、本当のコミュニケーションを通して意欲を高めることや、外国の社会や文化への関心を高めること（山内1996）は１学期間のメール交換でも十分可能であると考え、このプロジェクトでの具体的な目標を以下の３点に絞った。

1）目標言語によるコミュニケーションを実践する（目標言語でメールを書く）
2）お互いの文化を知る
3）学習意欲を高める

2.2　参加者

関西外大側参加者は、日木ゼミⅡを履修している大学３年生18名、Bucknell 大側は日本語を履修しているアメリカ人大学生６名であった。

Bucknell 大生のレベルを説明するために、Bucknell 大学の日本語プログラムをおおまかに述べたい。Bucknell で日本語を履修する者は、Japanese Ⅰ, Japanese Ⅱ, Japanese Ⅲ, Japanese Ⅳ, Japanese Ⅴ の順に履修することになっている。各コースの内容は以下のとおりである。

Japanese Ⅰ: Beginning language skills. Training in speaking and comprehending the basic sentence patterns of modern Japanese. Introduction to reading and writing.

Japanese Ⅱ: Continued training in the four language skills. Review of basic and introduction to complex sentence patterns. Reading of texts in basic Japanese.

Japanese Ⅲ: Application of the four language skills. Reading of texts written in standard Japanese and exercises in content-controlled conversation.

Japanese Ⅳ: Continued application of the four language skills. Reading and guided discussion of texts related to a variety of topics.

Japanese Ⅴ: Reading and discussion of selected materials. Exercises in the research skills of writing and presenting reports in Japanese.

今回、このプロジェクトに参加している Bucknell 大生６名は Japanese Ⅲ 又は Japanese Ⅴ を受講している学生で、すでに基礎レベル（Japanese Ⅰ, Japanese Ⅱ）の日本語を学習し終えて

いる。ここでいう Ⅲ, Ⅴ は日本語のレベルを表し、大学３年生、５年生を意味しない。

目標言語でメールを書ける相手であることを条件としたために、日本語の基礎レベルを終えた学生（Japanese Ⅲ 以上の履修者）に絞られ、結果的に学生数が６名とかなり限られた。

2.3 期間、内容、確認事項など

Bucknell 大学の2004年度 1st semester は８月から12月、2nd semester は翌年１月から５月であった。関西外大は2004年の４月から７月が１学期で、９月から翌年１月が２学期であった。Bucknell と関西外大の授業が同時に行われている時期は、2004年９月から12月であり、必然的にこの時期にプロジェクトを行う事となる。9月は２回しかゼミがなかったので、9月はメール交換する学生の写真やビデオ交換に当てられ、メール交換は実質10月から12月に行われた。

E-mail プロジェクトの内容は（１）目標言語を使った自己紹介、（２）目標言語を使って、相手の文化や目標言語に関する質問を２つする、（３）（２）への返答（関西外大生は英語で、Bucknell 大生は日本語か英語のどちらかで）、（４）目標言語を使って簡単なお礼を述べる、の４つであった。（３）でメール交換相手からの質問に答える際、Bucknell 大生が英語と日本語のどちらかを選択できるようにしたのは、彼らが日本語を学習し始めて１，２年とまだ日が浅く、母国語でないと質問に答えられない可能性があったからである。

関西外大生18名に対し Bucknell 大生６名という偏りがあったため、Bucknell 大生１名に対し関西外大生３名を割り当てた結果、６組の組み合わせができた。上記の４つのやり取りは各組の中で行われた。関西外大側では、プロジェクト後、各グループが交換されたメールを授業で紹介し、他のグループが行った交換内容を共有した。

その他、両大学間での確認事項としては以下のような事があった。

- E-mail project は該当科目の成績の一部に組み込む。予定の日時までに相手側に課題となっているメールを送信したかどうかが成績の対象になった。
- 教員が学生のメール交換をモニターするために、学生は両大学の担当教員にメール内容を cc で送る。
- お互いの文化をよりよく理解するために、相手の質問に返事をするときは日本、アメリカの代表ではなく、日本人、アメリカ人の１人として個人的見解を伝えていることが分かるようにする。
- 学生の負担を考慮し、最長でＡ４版１枚程度に収まる長さに抑える。
- error correction に関しては学生の自発的学習を阻害することを避けるために、学生が送るメール内容に関して教員が前もってチェックすることはなく、学生から質問があれば受ける、という姿勢を取る。

3．具体例と気づいた点

3.1では自己紹介例について、3.2では相手の文化や言語に関する質問と返答例について、それぞれ例を示し気づいた点を述べてみたい。

3.1　自己紹介の例と気づいた点

自己紹介は９月30日から10月５日の間に行われ、６組とも問題なくメール交換ができた。以下では Bucknell 大生のＳさんと関西外大生のＡさん、Ｎさん、Ｔさんの自己紹介交換例を挙げる。

【Bucknell 大生、Ｓさんからの自己紹介】

> はじめまして！私の名はＳでございます。
>
> 私はバックネール大学の四年生で社会学と東アジア研究の専攻です。バックネール大学はペンシルベニア州の真ん中であり静かな田舎なのにこのキャンパスは大学生がいっぱいいるし毎週色々なイベントがあるのでおもしろい所です。
>
> 去年、AKP と言う留学プログラムとして京都で一年間ぐらいに留学しました。その留学の経験は私にとって意義深い年でした。日本語を学んだし日本の文化に慣れました．それだけではなく、自分でもたくさん成長した感じがあります。時間が経つにつれて京都がもっともっと懐かしくなります。河原町で歩いている思いでと阪急線で毎日変える思い出などよくします。
>
> 私は韓国で生まれました。しかし、大体アメリカで育ったし教育もアメリカの学校からもらったから私は韓国人と呼ぶことよりアメリカ人と呼ぶの方が正しいと思います。両親と弟はフイーラデルフイアに住んでいるけど外の全員の家族はソウルに住んでいます。
>
> 皆さんとこのメールとして連絡ができるので喜びます。これからよろしくお願いします。

【関西外大生のＡさん、Ｎさん、Ｔさんそれぞれから Bucknell のＳさんへの自己紹介】

> Nice to meet you S, and thank you for your mail!!　We're very glad to start to contact with you.
>
> Hello, S. I'm A. I'm 21years old, and 3rd grade at Kansai Gaidai University.I'm majoring in French, but it's very difficult language for me…And I learn about teaching. I want to teach Japanese language for many people who interested in my country in the future. My

hobby is watching movie, recently I often watch Horror movies. If you have interest in movies, I'd like for you to talk about various movies with me.

Hello. I'm N. I'm glad to join this e-mail project. Your Japanese was so lovely and I was surprised of it. I am third grade at Kansai Gaidai University. I'm majoring in French and trying to get the second-class of French examination.

I live in Shiga so I often go shopping to Kyoto. Actually, I went to Kawaramashi yesterday!!! There is the possibility that we met somewhere in Kyoto last year.

I'll tell you my pets. I have a dog and a turtle. The dog is Shiba (Japanese dog) and his name is Ron. He loves eating so much. The turtle's size is 17cm. He has belonged to my family for 7 years. He likes to sunbathe.

Hello. My name is T. I'm 20 years old. I'm a student at Kansai Gaidai, and I'm majoring in Chinese.

I belong to a light music club, so I like music very well. I often listen to music in my free time. These days, I like guiter pop music. After class, I go to club. And I practice, or talk to the member. I like the club, because I have a lot of friends.

I usually work part-time at STARBUCKS COFFEE on the weekend. The work is very hard, but it is interesting for me to work.

In Japan, it is fall. The leaves turn in fall, and it is very beautiful, so I'm going to go to kyoto with my friends.

Let's have a fun with this e-mail project (^-^)/

この段階で教員側が気づいた点は、日本語、英語ともに誤りが多々あったことである。確認事項で前述したように error correction に関しては、学生が送るメール内容を教員が前もってチェックすることはなく、学生から質問があれば受ける、という姿勢を取る予定であった。しかしながら、同世代の大学生に自己紹介をするのに「私は○○でございます」と丁寧過ぎる書き方をしたり、junior（大学３年生）と書くべきところ、3rd grade（小学校３年生）と書いたり、指導を要すると思われる点が多かった。また、何の指導もしないと、このまま間違えた使い方が通用すると誤解し、error の fossilization が起こるのではないかという心配も出てきた。両教員は error correction をしたほうがよいという意見で一致した。但し、全ての error について修正してしまうと膨大な量になり学生にとって精神的な負担が大きくなるし、やる気も失せてしまう可能性もあると考え、大きな誤りと考える項目３つに絞ろうということになった。

学生へは自己紹介が終わった段階で授業およびメールにて、受け取った自己紹介の中の誤りを３つ訂正するように伝えた。

前述の関西外大生のＡさん、Ｎさん、Ｔさんが送った自己紹介に対して Bucknell 大生Ｓさんが修正した例を以下に挙げる。Ｓさんは関西外大の３人グループに対して３つの修正をしたので、結果的に１人に対し１つの error correction をすることになった。

【Bucknell 大生、Ｓさんから関西外大生のＡさん、Ｎさん、Ｔさんに対する修正】

Hello. For each of the letters I received, I have picked out one sentence and made suggestions for it.

For Ms. A

"I want to teach Japanese language for many people who interested in my country in the future"

I think saying, 'I want to teach Japanese **to** many people who **are** interested in my country in the future' has a more natural-sounding feeling to it. *^^*

For Ms. N

"I'll tell you my pets."

I think saying, 'I'll tell you **about** my pets' will be a better way to construct this sentence. *^^*

For Ms. T

"I belong to a light music club, so I like music very well."

I think saying, 'I belong to a light music club, so I like music very **much**.' has a more natural-sounding feeling to it.

Ｓさんは修正だけでなく、次のような日本語の返事も添えてくれた

【Bucknell 大生、Ｓさんから修正に加えて送ってきた返事】

皆さんの手紙を楽しく読みました．ありがとうございます！

Ａさん、

私も映画を見るのが大好きです。日本にいた時、ワタボイズとラーブレターと言う映画を見ました。分かった部分はおもしろかったけれども映画の中に使った日本語は分かりにくかったです。ハーラー映画はあまり好きじゃないです。ハーラー映画をみると私は寝れなくて、長い間に怖いイメージしか考えられません。たった一回、リングと言う映画をみました。その後に１ヶ月ぐらい鬼がテレビから出るかと心配してストレースがたまり続けま

した。
Aさんはハーラー映画を見ると怖くないですか。勇敢な女ですねえ！Nさん、
去年、河原町で会ったかもしれませんね！私はいつも高島屋や阪急デパートからバスキンロービンズでアイスクリームを食べて、カラオケに行って（一時間で210円だけ！）あそんでいました。
私も子供の頃亀が三匹いました。しかし、これは悲しい話です。ある日、3匹の亀とあそんでいると、私がトイレを使うに立った瞬間、亀1匹を踏んでしまって亀が死にました。他の亀はびっくりして、速く逃げました。どうやってこの2匹の亀が立っている私から逃げたかまだ分かりません。その後に本当に落ち込んでなりました。私は6歳でした。
Tさん、
私も20歳です。ほかの四年生より1年ぐらい年齢が遅いです。なぜ今3年生ではなくて四年生のか分かりません。
私も音楽がだいだいだい好きです。歌を歌うのも歌を聞くのも、慰めれます。ザブリリアンとグリーン（ブリグリ）と言うバンドをしていますか？私は日本のバンドの中でこのバンドが一番だとおもっています。私はこのバンドのコンサートを見るのが欲しいですが、最近は休んでいてみたいです。
どのスターバックスでアルバイトをしていますか？去年、全部の京都のスターバックスを教える地図をどこからかもらったので友達と全部のスターバックス行くように決めて全部のスターバックスに行ったことがあります。これはうそではありません。本当です。

このように丁寧な返事を受けた学生はどれほどか嬉しかったに違いない。多少の error があったとしても、メール相手に対して強い興味を持ち、自発的に返事を送ることこそが、authentic communication を成功させる要素の1つではないかと思い知らされた。このように人間関係を築きながら、言語・文化を学ぶことは、このようなプロジェクトならではのものだと感じた。

お互いの言語を学ぶ者同士が互いに error をしながらも、理解しようとして communication をはかっていく過程を見て、学習段階において error を許容するよい機会にもなったのではないかと推察する。

3.2　相手の文化・言語に関する質問とその返答、及び気づいた点

10月10日から11月27日の約2ヶ月の間に相手への質問を送り、相手からの質問に対する返答を行った。まず関西外大生からの質問を示し、その中の1つに対してどのような返信があった

かを挙げたい。

［関西外大生からの質問内容］

1．What did you work during internship? Do almost of the students experience internship in your university and USA?
2．Mrs. Doubtfire, this Film's theme is divorce. There are many divorce in American couple. Japanese people consider that marriage is a kind of goal. The couple experience hard things and happy things in the future. Then, have a question. How do you think marriage and divorce?
3．What do you have any special products of your region?
4．In America, where do American young people go out on a date?
5．As a Japanese traditional lifestyle, most of women tend to do more housework than men. In your family, who does housework very often?
6．You told me that you are going to apply for both graduate school and job. In American society, can people go to graduate school while they are working?
7．What do you think of your education system in your country? Are you satisfied with it? Could you tell me a little bit of your way of thinking?
8．What do you proud of Texas?
9．What is the image of Japanese?
10．Please tell us about the birthday party and Halloween party?

例えば、９番目の質問に対しては以下のような返答があった。

【Bucknell大生、Ｓさんからの返答】

My image of Japan greatly changed after my year in Kyoto. Before, I thought that because of Japan's homogeneous population, everybody had the same beliefs about being polite and respecting education. Now, I think Japanese culture is very complicated with much that is said and unsaid between two people in a conversation. While older Japanese greatly value traditional materials and ideas, I found that many young Japanese were similar to young Americans, especially when it came to having fun and hanging out with friends. Still, I know that Japanese culture is distinctly different, especially in the ideas of 'inner' and 'outer' groups. I was also amazed at how fashionably dressed men and women were on a daily basis.

この学生は日本に来たこともあり、日本に対するイメージを明確に述べている。

次に Bucknell 大生からの質問を示し、その中の１つに対してどのような返信があったかを挙げてみよう。

［Bucknell 大生からの質問内容］

1．２週間前に、授業で『日本語なるほど』という番組を見て、日本の若者の流行語について学びました。例えば、ガンというと強いの意味。今、関西で若者がよく使っている流行語を少し教えてください。

2．日本の大学生の中に女性たちは大体どんな仕事を欲しいですか。卒業するまでにもう１年や２年しかないので未来をもっともっと考えてなるのは当たり前です。その夢ややりたい仕事をひとつ説明して下さい。

3．最近、私の大学ではだれもデートしません。その代わりに“フック・アップ”する方が普通になりました。“フック・アップ”と“デート”の意味や感じは全然違います。デートするとボイフレンドと付き合ってロマンチックな気になるですが“フック・アップ”したら別に知らない人とキスとかセックスかをして二人は何も予想しません。日本の大学生の生活にはデートするのはどうですか？デートらしいですか？“フック・アップ”みたいですか？

4．どして入学の試験が難しいけど大学のことが矢指よりですか。

5．日本では日本人にブラインドデートがたくさんありますか。

6．会話にどしてお天気を反しますか。“お元気ですか”って言ないことがよくわかりません。

7．日本車についての質問を聞きます。どうして何年間も他の車に乗ると必ずこわれるのに、日本車がこわれないのですか。そのりゆうは何でしょうか。

8．今度日本語の授業では日本とアメリカの高校と大学の違いのことをよんでいます。日本では高校の勉強が大学の勉強よりやさしそうですが、本当ですか。(「大学の勉強が高校の勉強よりやさしそうですが、本当ですか」が意図した質問だと思われる。) アメリカでははんたいです。大学の勉強が高校の勉強よりすごく難しいです。先生も厳しくて予習もすごいです。

9．What do you think is the most important goal for you personally in attending college?

10．What do you think are the most important things for non-Japanese to understand about the Japanese people?

11．和食はおいしそうです。どちら食べ物が一番いいですか。どうしてですか。作る方が教えてお願いします。

12．かんさいの大学に卒業して後で、何をしますか？

13. 日本では奨学金をもらうことが珍しいですか？奨学金が多いですか？大学でスポーツ（運動競技？）をすれば、奨学金がもっともらえうあすくなりますか？アメリカではほとんどそうです。
14. 若者には、日本と米国の映画から、一番明らかな違いは何ですか？

例えば1番の質問に対しては以下のような返答が関西外大生からなされた。

【関西外大生、Nさんからの返答】

1．I often use "バリ" and "うざい". First, I tell you about "バリ". This simply means "very". I and my friends use this word like "バリおもしろい" or "（値段などが）バリ高い". Next, "ウザイ" means "kind of annoying". "うざい" is short for "うざったい". I often use this word. I can hear young people say this one like "雨うざい" or "バリうざい".

質疑応答をしてよかったのは、日本の若者が使う言葉など、通常テキストでは扱われないような内容を教えている点である。また、同世代の若者たちがお互いに興味を持っている言語・文化について対等な立場で共有していくプロセスは貴重であったと思う。

同時に次のような問題も明らかになった。

- 答えやすい質問の仕方の指導：関西外大側の7番の質問（What do you think of your education system in your country? Are you satisfied with it? Could you tell me a little bit of your way of thinking?）で言えば、質問が大きすぎて、education system で何をさしているのかも漠然としている。相手が答えやすい質問をする配慮をしていくべきだと感じた。
- 有意義な内容の質問をさせる指導：関西外大の3番目の質問では、「あなたの地域の特産品」について聞いている。この質問がいけないというわけではないが、インターネットで調べればわかるような質問である。せっかくメール交換をしているのだから、教科書や本からではなかなかわからない内容や、相手の経験や価値観などを聞くように指導するのも1つだと感じた。その点で Bucknell 大学側の1番目の質問（関西で若者がよく使っている流行語）などは面白いと思う。
- Error correction を誰がどの時期にどの程度すべきかという問題：Bucknell 大学側の4番の質問（どして入学の試験が難しいけど大学のことが矢指よりですか。）のように、内容が分かりにくい質問があった。関西外大生は、返信したメールで「日本では入学は難しいが、なぜ大学を卒業するのはやさしいのか」が質問者の本当の意図かを確認して

対処した。今後このようなプロジェクトをする際に、意味ある質問をするには、教員側がどこまで手助けしていけばよいかを考えていくべきだと感じた。また、自己紹介の段階では学生同士で修正をさせたが、質問・返答の段階になると学生もレポートやクイズなどで忙しくなってきたこともあり、課題を追加することは実質難しかった。今後は教員側、学生同士の error correction をどの時期にどの程度すべきか、考えていかなければならない。

- 質問に対して的を得て、適切な言語表現で返答する指導：Bucknell 大生からの質問（日本では大学の勉強が高校の勉強よりやさしそうですが、本当ですか）に対し、関西外大生は "In our opinion, it is too hard to enter the University in Japanese. So, Japanese senior high school education is very important. But Japanese senior school doesn't always harder than university ones. After all, famous public university needs high grade." と返答した。日本語では（恐らく日本ではと書こうとしたのだろう）難しすぎて大学に入れない、と1行目で言っておきながら高校の勉強が必ずしも大学の勉強より難しいとはいえない、と矛盾したような内容になってしまっている。最後の行では有名な国公立大学はいい成績を求める、と前の行から内容が飛躍してしまっている。このように明らかに説明不足で、読み手に分かりにくい返答となっている場合、読み手に分かりやすい内容を書く指導を行う必要があるだろう。
- Bucknell 大生の中で授業を落とし、返信してこなくなった学生がおり、結果的にメールが受け取れない関西外大のグループができてしまった問題：Bucknell 大生の何人かの返信が途中で途絶えてしまった理由としては、2つ考えられる。まず、日本語を書くことはアメリカ人大学生にとってレベル的にかなり難しく、そのために返信に時間がかかりすぎたり、負担になって中断してしまったのではないかと考えられる。今回は目標言語で書くということにしたが、今後は学生の負担も考慮して目標言語で読むということも考えられる。レベル差があっても、目標言語で読むということであれば、かなり基礎レベルの学生でも参加が可能になってくるであろう。国際理解を深め、学習意欲の向上を目的とするならば、母語で書き、目標言語で読むというやり方でも目的は達成できる。2つ目の理由としては、アメリカの単位取得の厳しさが考えられる。アメリカの大学生は一般的に、授業を取得するためにかなりの予習復習をせねばならない。今回のプロジェクトが成績の一部に含まれていたとはいえ、他の授業にかなりの時間が割かれてしまったのではないかと考える。

4．参加者の感想

次にこのプロジェクトを振り返り、学生がどのような感想をもったかについて述べたい。4.1では関西外大生、4.2ではBucknell大生の感想を・意見をまとめた。

4.1　関西外大生の感想

プロジェクト終了後、授業にて学生にプロジェクトの感想（よかった点・改良すべき点など）を自由記述で書いてもらった。無記名でよいとしたが、あえて氏名を書き感想を述べている学生もいた。

4.1.1　関西外大生が感じたプロジェクトのよかった点

このプロジェクトに関して関西外大生がどのようなメリットを感じたかをまとめると大きくいって、1）異文化理解ができた、2）学習意欲が高まったし、楽しかった、3）英語の勉強になった、4）その他、の4つになるようだ。具体的な学生の声を順に挙げる。

1）異文化理解ができた

約半分の関西外大生がこのプロジェクトのメリットとして、異文化理解につながり、楽しかったという意見を述べ、もっとも多い意見となった。具体的に以下のような感想があった。

- 教科書ではできない文化理解ができた。
- アメリカの大学生がどのような生活を送っていて、どんな勉強をしているか知ることができ、よい刺激になった。インターンシップなども経験された方だったので、いろいろ共感できることもあり楽しかった。
- 現地のアメリカの学生の声が聞けて楽しかった。
- 同年代という事で親しみを持てる相手とのメールやりとりができるきっかけとなった点。同年代だからこそ比較できる将来の事、デート、日常を質問しあえて、文化の差異を知るきっかけとなる点。プレゼンによって他のメンバーの発表が自分の知識を深めることが出来る点

2）学習意欲が高まったし、楽しかった

次に多かった意見は、学習意欲が高まったというものだった。具体的な意見をいくつか挙げてみよう。

- 興味・意欲がわきやすく、楽しみながらアメリカ文化を知ることができました。
- 外国の人と関われたのがよかった。と思う。楽しかった。

- 実際にアメリカの学生とEメールをやりとりするということがドキドキしました。なかなかこういうきっかけはつかみにくいので、良い機会でした。楽しかったです
- 今回一番いいな、と思ったのは、お互いの国の言語を勉強しているということで、お互いの国に興味をもっていることです。またこんな機会があれば、是非してみたいです。素晴らしい機会をありがとうございました。

3）英語の勉強になった

- 自分の英語の間違いを指摘してもらえたり、文章の構成を考えたりとすごく英語の勉強になった
- 最近遠ざかっていた英語に触れられた。

4）その他

その他にも次のような意見もあった。

- e-mail project 自体は良い経験になったと思います。今度は個人的に誰かと出来たらいいなと思いました。
- 私達は相手が〇〇さんだったので、メールのやりとりが正常に行われ、とても有益なものになりました。

4.1.2 関西外大生が感じたこのプロジェクトの改良点

ほとんどの学生が最大のデメリットとして感じたのは、返信メールを送ってこない学生がいたことである。最初の自己紹介までは問題なくメール交換が出来ていたが、質問をする段階になって、なかなか相手から質問が送られてこなかったり、質問が来ても返信メールを送る期日ぎりぎりに来たりと、問題があったと指摘する。具体的なコメントを1つ挙げてみよう。

- 私達の班は思ったようなやりとりができず、残念でした。しかし、アメリカの学生の中にも不真面目な人がいるんだという発見がありました。よかったことです。きちんとやりとりできるのなら、e-mail project は楽しいものになると思います。

相手からの返信を確実に受け取れるようにするために、次のような提案もあった。

- （中略）その為、例えばバックネルの方もグループにしてもらうというのはどうでしょうか....バックネルの方は人数が少ないので、こちら側がより大人数グループになってしまいますが、3対1で返信が来ないようなら、5対2のほうがまだましかな...と思います。もし1人がサボっても、もう1人に期待ができるので....」

当たり前ながら、途中で途絶えることなくお互いがメール交換をする事が、いかに大切で且

つ現実では難しいかということを感じた。「意味のある読み手と書き手を築くメディア」としてメール交換が成り立ったときの参加者の喜びは大きい。それだからこそ、教員側に出来る事は最善を尽くして、メール交換が成り立つ環境を整えていくことであろう。

その他のコメントとしては、メール交換の回数を増やすことを希望する、お互いの質問・返答が分かりにくいものもあったので修正を加えてメール交換をすべきだ、1対1のメール交換を希望する、などがあった。さらに、メール交換は遠距離なので、中宮キャンパスの留学生と直接会って交流したいという希望も出た。

4.2 Bucknell 大学生の感想

以下は Bucknell 大生の意見を Bucknell 大学の担当教員がまとめたものである。

> In general, my students were pleased with the project, but they wished they could discuss a variety of subjects in greater depth with their Japanese counterparts. My students do not have the capacity to construct such email conversations at their skill level, so perhaps next time we can allow for one part of the exchange to be in English from Bucknell and Japanese from Kansai Gaidai. Then at least once our students could say what they mean and indeed mean what they say. One person did say that she wished there could be one-on-one work as well, because it is difficult to respond to several email partners. She indicated that she had hoped for a more "intimate" (meaning close and friendly) correspondence, but that is difficult due to time restrictions. Most of my students really felt frustrated in their own inability to express themselves. They also felt there was a communications gap between them and the Japanese students. It is hard to put one's finger on what they mean by that, but I think it has less to do with language ability and perhaps more to do with a cultural divide.

Bucknell 大生がこのプロジェクトでもっといろいろな内容について深く討論したいにもかかわらず時間的制約があってできないことや、書きたいことと書けることのギャップに苦しんだことが伝わってくる。コミュニケーションギャップを避けるための手立てとして、Bucknell 大生は英語で、関西外大生は日本語でメール交換するという案が教員間で出た。確かにそうすることで、かなり深い内容まで語り合える可能性が広がるかもしれない。

5. E-mail Project の意義と今後の課題

最後に、本プロジェクトの目指した3つの目標がどの程度達成されたかを振り返り、今後の

課題を明確にしていきたい。

まず、最初の目標、「目標言語によるコミュニケーションを実践する（目標言語でメールを書く）」から振り返りたい。今回のプロジェクトで関西外大生は中断することなくメール交換を実践したが、Bucknell 大学生の何人かは返答が遅れ、または中断してしまった。Bucknell 大生から返答が来た組に関してはコミュニケーションを実践することができた。その意味ではこの目的は半分程度達せられたと考えてよいだろう。日本語を学習し始めて2年ぐらいのアメリカ人大学生にとって日本語でメールを書くことは極めて難しく、何人かの返事が遅れたり、ドロップアウトしてしまう結果となった。しかし、目標言語によるコミュニケーションを実践するめには、中断することなくメール交換をすることが必須である。今後はメール交換が継続するように、アメリカ人学生が難しい内容のメールを送るときは英語でもよいとする、などメール交換を継続しやすい環境作りを整えていくことは大切であろう。

2番目の目標は「お互いの文化を知る」という目標であった。この点については学生が疑問に思った相手の文化などについて自由に聞き合える状況であったと思う。但し、相手が答えやすい質問の仕方、読み手がわかりやすい返答の書き方、適切な言語表現の仕方、など今後教員側が学生に指導するとよい点が明確になった。

3番目の目標である「学習意欲を高める」は、学生たちの感想からわかるようにかなり達成されたと思う。参加した多くの学生はこのような authentic communication の機会がもてたことを喜び、今後はもっと親密に、頻繁に話し合っていきたいと願っている。authentic communication だからこそ、communication ツールとしての言語を使い、人間関係を築く実践ができるのではないだろうか。Communication を促進するために、言語をどのように駆使するか試行錯誤できるという点ではこのプロジェクトは意義が大きかったと思う。

今後は以上のような課題に1つ1つ取り組み、authentic communication を促進する英語教育の実現に努力していきたい。

参考文献

杉本卓・朝尾幸次郎（2002）『インターネットを活かした英語教育』大修館書店

山内豊（1996）『インターネットを活用した英語授業』ＮＴＴ出版

注

1）Bucknell 大学はアメリカ合衆国ペンシルバニア州ルイスバーグ市にある私立大学である。学生数は、学部生が約3,350名、大学院生が約200名。学部には the College of Arts and Sciences と the College of Engineering の2つの colleges があり、前者には、筆者の一人 Armstrong が所属する the department

of East Asian Studies を含む23の departments と他に７つの interdisciplinary programs がある。

２）Assistant Adj. Professor of Japanese, the department of East Asian Studies, Bucknell University

（ひき・くるみ　国際言語学部助教授）

（Elizabeth Armstrong　Bucknell University）